

## 都忘れ

池松 孝子

昔々、母のお花の稽古について行った時のこと。何かの花木の足元に薄紫の可憐な花が添えられていたのを覚えていた。その名を「都忘れ」と認識するようになったのは自分自身が花道に興味を持ち、稽古に通うようになってからだ。

都忘れは元々本州、四国、九州の山地に自生していた深山嫁菜みやまよめなから栽培された園芸品種で、江戸時代にはすでに栽培されていた。華やかな花と言うのでない。しかし、その佇まいは清楚で誰でも親しみを持って好ましいと思うだろう。それは実際の花そのものの姿を見て感じ取るものよりも、「都忘れ」という名前によるところも多いにあるのではないかと思う。古風で上品な印象の名前でもある。

花の名前の語源、由来にはいろいろなルーツがある。例えば最もよくあるのが花の姿の特徴をふまえたものだ。花の見た目からくるものである。紫陽花、向日葵などが挙げられる。また、外国語（ラテン語やギリシャ語）によるもの、伝説や神話の由来をもつものなども多い。さらには花の咲く場所によるものなど。この深山嫁菜がその例である。

「名は体を表す」とかいうが、この花はその美しい名前そのものが、都人という印象を決めてしまっているのだ。遠く離れた佐渡に流された順徳天皇の悲しみを癒すために「都忘れ」と名付けられたとの説話がある。承久の乱に敗れ佐渡に流された順徳天皇は21年間にわたり、京への帰還は果たせず46歳で崩御。都への思いの募る年月だったろう。佐渡でこの花を目にし、都への思いが断ち切れず、傷心の年月を過ごした天皇の心情が偲ばれて切ない。佐渡の日々この花が慰めとなったのだろう。

いかにして契りおきけむ白菊を都忘れと名づくも憂し 順徳天皇

順徳天皇は「百人一首」にも歌が残る。歌論書、歌字書にも優れ、なかでも『八雲御抄』やくもみしょうはよく知られている。都でまとめた草稿本にさらに佐渡でも書き加え、かつて教えを乞うた都の藤原定家に送付したという。